

# 棚田の多面的機能等の見える化と発信による営農継続への寄与の検証

## Verifying the Contribution to Continuous Farming by Visualizing and Conveying the Multifunction of Terraced Rice Fields

○吉田拓矢\* 平井朝葉\* 稲田あや\* 内川義行\*\* 生玉修一\*\*\*

YOSHIDA Takuya, HIRAI Asaha, INADA Aya, UCHIKAWA Yoshiyuki, IKUTAMA Shuichi

1. はじめに：中山間地域の農地は全国の約 38%を占めており、農作物の供給という農業の本来の機能だけでなく、洪水の防止や水資源の涵養、地域の伝統文化の保存など様々な多面的機能の発揮により、我々の日常生活を支えている。一方そこでは地形的な条件不利性や高齢化・過疎化等の影響により、耕作放棄率が平地と比較して高く、今後も増加が予想されている。農林水産省ではこのような状況に対して中山間地域等直接支払交付金等の施策を実施しているが、こうした施策を真に意義あるものとするためには、中山間地域の価値を国民に広く知ってもらうための多面的機能の評価や情報発信等の推進が有効だと考えられる。しかし、実際に多面的機能の評価や情報発信が中山間地域の営農継続に、どの程度あるいはどのように寄与するかは確認されておらず、検証が必要である。そこで著者らは上記のプロセスを検討するとともに、長野県上田市にある稲倉の棚田をモデルとして、営農実態や多面的機能を動画として試行的に発信し、アンケート調査を行った。

2. 方法：本検討においては、営農実態や多面的機能の見える化と発信が棚田営農の継続に対する支援につながるという仮説を置き、この仮説を4つの作業要素によるプロセスで図解した(図1)。要素1「棚田営農の手間見える化」は条件不利地である棚田の営農実態(労働時間やコスト)を定量的に示すことである。要素2「棚田の多面的機能の見える化」は、物理的機能や社会的・文化的機能を定量・定性的に整理することである。要素3「見える化した情報をわかりやすく発信」は、営農実態や多面的機能を動画やスライド等の手段でわかりやすく整理し発信することである。要素4「情報発信に対する反応+営農への支援」は情報発信により継続的な棚田営農への支援のリソース(外部からの声、人資源、資金等)確保につながっているかを検証することである。要素1・要素2については、営農の労働実態や多面的機能について、稲倉の棚田の関係者から具体的なデータを提供いただくなどにより、数値やメカニズム

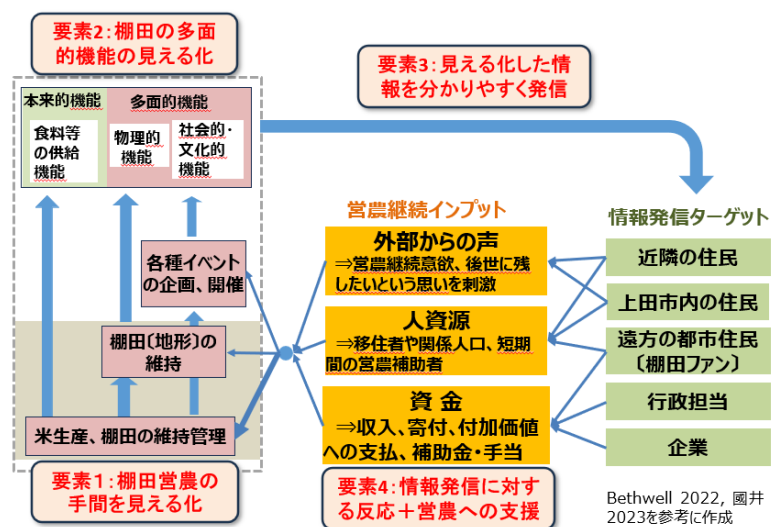


図 1. 多面的機能の評価及び情報発信のプロセス

Fig. 1. Process of evaluating and conveying multifunction

\*いであ株式会社(IDEA Consultants, Inc.), \*\*信州大学農学部 (Shinshu Univ.), \*\*\*農林水産省 (Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries.)

キーワード：中山間地域, 棚田, 農村振興, 多面的機能

の図解など客観的な説明が可能なアウトプットとなるよう整理・評価を行った。要素3については、5分程度の動画を作成した。動画の構成はa：稲倉の棚田の紹介、b：営農実態の説明（営農者インタビュー）、c：多面的機能の説明、d：稲倉の棚田の将来ビジョン（関係者インタビュー）、e：棚田に関わる宣伝募集、の5部構成とした。作成した動画については長野県在住の方を中心に一般の方46名に視聴いただいた。要素4については、動画視聴者を対象に簡易なWebアンケート調査を実施し、動画の中で印象に残った部分や、動画視聴後に稲倉の棚田に関わってみたいと思ったか、その場合どのような事項に関わってみたいと思ったか等を尋ねた。

**3. 結果：**アンケート調査の結果、動画の中で最も印象に残った場面は、c：棚田の多面的機能の説明であった（図2上）。また、動画の視聴により稲倉の棚田に関わってみたいと感じたかについて「1：強く思う～5：全くそう思わない」の5段階で尋ねた設問では32人（回答者の約7割）が「1：強く思う」、「2：やや思う」と回答した。以上の回答をした32人にどのような関わり方をしたいかを尋ねた設問では、棚田で開催されるイベントへの参加が23%と最も多く、棚田産の商品の購入が16%と2番目に多かった（図2下）。動画全体に対する自由記述では、「米の生産以外の棚田の役目を初めて知った。」「多面的機能をもつ棚田を守るべきだ。」といった回答が得られた一方で、上田市以外や長野県外在住者からは「棚田が遠く関わりにくい」といった回答も得られた。

**4. 考察：**動画の中で多面的機能の解説が印象に残ったと回答した人が多く、回答者の約7割が稲倉の棚田に何らかの形でかかわってみたいと回答していたことから、多面的機能や棚田の営農実態を説明することで、営農継続に資する活動への参加を促せることが示唆された。一方で、自由記述回答には「多面的機能の恩恵を受けるのは棚田に近い地区だけだと感じた」、「居住地から遠い」といった意見があり、多面的機能を伝える場合には、棚田と居住地との距離等をふまえて、伝える内容を変更するなどの工夫が必要であると考えられた。また、本検討では、動画内で一部の多面的機能のメカニズムは説明したが定量評価や経済価値評価は示していないこと、アンケートは試行的に実施したものであり、回答者数が少なく、統計的な妥当性は確保されていないこと、アンケート回答者が営農継続に寄与するアクションを実際に起こすかまでは検証できていないこと、等の課題が残されている。引き続き検討を行い、冒頭の仮説の検証、及び他の棚田への営農継続につながる手法を確立していくことが求められる。

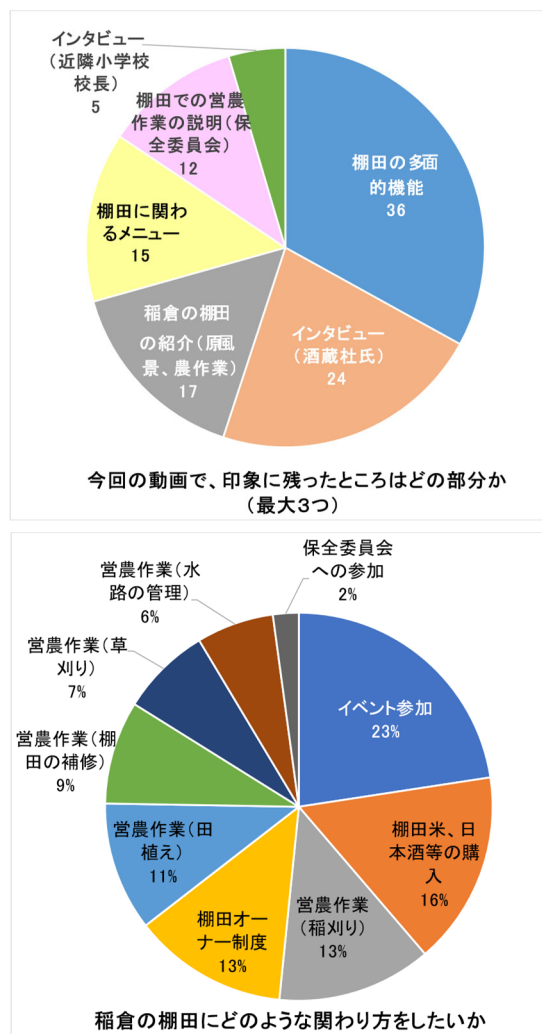


図2. 動画視聴後のアンケート結果  
（上図：印象に残った場面、下図：どのような関わり方をしたいか）

Fig. 2. The results of questionnaires